

Title	高浜虚子編『新歳時記』の三版種
Sub Title	
Author	福井, 咲久良(Fukui, Sakura)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.50 (2009. 12) ,p.1- 13
JaLC DOI	10.14991/002.20091200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20091200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高浜虚子編『新歳時記』の三版種

福井 咲久良

はじめに

俳句革新運動を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかつたとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は「袖珍俳句季寄せ」を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった。彼の俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実からも十分察せられる。そして虚子の生涯最後の単独責任編集歳時記であり、虚子の歳時記・季寄せ編集の集大成とされるのが、虚子編『新歳時記』である。今日も増刷され続ける『新歳時記』はまさに、虚子の生んだロングセラーである。

しかしながら、『新歳時記』についての先行研究は決して多くはなく、それらは『新歳時記』に少なくとも三版種が存し、三版種間に異同や差異がみられることを自明の理としつつも、この異同や差異について論じる際、その全体像にはあまり触れていない。

本稿は虚子編『新歳時記』三版種間のすべての首題³の異同を調査することによって、『新歳時記』の改訂、再改訂のあり方を明らかにし、さらに異同の見られた首題を複数取り上げて、

二度の改訂の実施の背景を考察するものである。

一 高浜虚子編『新歳時記』

虚子編『新歳時記』の内容上の特徴については、虚子がある序に「季題の取捨」「四季の区別」「季の決定」「季題の排列」「解説」「例句」の六項に分けて自身の試みを詳述している。しかし、井出原太郎によれば、中でもこの歳時記の重要な特徴は、虚子による「季題の精選とその並べ替え」にあるという³。

では実際に、『新歳時記』には、どのような季題がどのような配列で収められているのだろうか。

二 高浜虚子編『新歳時記』の三版種

虚子編『新歳時記』に収録される季題とその配列について考えるとき、避けては通れない問題が、『新歳時記』の二度の改版である。虚子は昭和九年に初版『新歳時記』を三省堂から刊行し、その後昭和十五年に改訂版を、さらに終戦後の昭和十六年に再改訂版を同じく三省堂から刊行した。改版、再改版の際に『新歳時記』に加えられた「改版に際して」「再改版に際し

て⁶⁾では、版ごとに内容に変更点がある旨を虚子が明言している。

この変更点、すなわち異同について、「熱帯季題」に関する先行研究は散見されるものの、「新歳時記」三版間の季題の異同の全体像についてはこれまであまり論じられていないように思われる。なお、この再改訂版の奥付に、昭和九年版を「初版」、十五年版を「改訂版」、二十六年版を「増訂版」とあるのに従って、本稿では以下、各版を初版、改訂版、増訂版として区別する。

三 高浜虚子編『新歳時記』三版間の季題の異同とその分類

では実際に、虚子編『新歳時記』の季題の精選と配列について、三版種類の異同を見ていこう。今回は季題の中でも各季題の首題に注目し、首題の有無や配列の差異を調査したが、その結果を月別にまとめたものが表1である。

表1によると、まず三版間の首題の配列について見るに、季題の配列順が前後で入れ替わるなどの細かいレベルまで点検しても、異同は殆ど見られない。このことから、『新歳時記』初版の季題配列に対する、虚子の自信が窺えよう。次に首題の有無について確認すると、これも『新歳時記』全体の収録首題数からすれば、異同はやはり少ないと言えようが、いわゆる「熱帯季題」群がまず比較的大きな異同として指摘でき、それ以外にもわずかずつだが版によって首題の有無が認められる。

続いて、異同の見られる首題を分類し、異同の発生理由について考察を試みる。表2の分類は、首題をその出現パターンに

よって分類したものである。表からは、b型、f型の出現パターンを示す首題が多いこと、つまり、『新歳時記』の異同の大まかな傾向として、初版に首題を大幅に増補する形で改訂版が刊行され、この改訂版からの大幅な首題の削除を経て増訂版が刊行されたことが指摘できる。f型の出現パターンを示す季題は、数が多いが、その大部分はすでに「熱帯季題」として、先行研究で度々論じられているので、ここでは取り上げない。本稿ではこの改訂・再改訂の大きな流れに乗る首題群の中から出現パターンのb型に属する季題「パカチ」と「バナナ」を取り上げ、この異同傾向が生じた理由について考察していくこととする。

四 外地を想定した季題の例①—パカチ

さて、「パカチ」は今日の我々には馴染みの薄い季題と言っ
て良いだろう。現に小学館『日本国語大辞典』を始めとする、
現行の大型国語辞典にも、また集英社や講談社の刊行する大型
歳時記にも、季題「パカチ」は確認されない。そこで初めに、
『新歳時記』の「パカチ」項を確認しておくこととする。

資料・初版 虚子編『新歳時記』「パカチ」項

※改訂版の「パカチ」項も左と同文

パカチ^③丸い瓢の属で、朝鮮などに多く屋根等に逼はせ
てある。乾して水汲に、大きいのは炭斗などにも用ゐる。
垣パカチどちらの家のものなるや ^④すゞえ

『新歳時記』の季題解説文は、季題「パカチ」が朝鮮半島に多く見られる、なり瓢であるとする。そこで執筆者はこの「パカチ」が、朝鮮語の바가지から来たものではないかと考えた。

しかしながら、各辞典の바가지の解説文によると、바가지はなり瓢から作った器を指し、なり瓢そのものの意をも持つとした辞書は、管見の範囲内では確認できない⁽¹⁴⁾。つまり、季語「パカチ」と、少なくとも今日の朝鮮語の바가지では、語義に隔たりが認められることとなる。

加えて、朝鮮半島を舞台に想定した季題が、『新歳時記』に収録される例が他にあるかという点についても考察を要する。以上の二点について推測、考察を試みよう。

初めに、語義の隔たりについてである。昭和十四年十月号の「ホトトギス」の対談記事によると、この語義の隔たりはすでに当時から認識されていたながらも、なお、「俳人仲間では今日パカチと云へば植物も云ふし、器になつたものも云」つていたことがわかる。当時の俳人たちは、なり瓢をその加工品の名称「パカチ」で呼んでいたのである。丁度、同じふくべ植物であるへちまにおいて、植物名とその加工品に対して同一呼称が用いられるようになったのと、同様の現象であろう⁽¹⁵⁾。

ではさらに、朝鮮半島を想定した季題が『新歳時記』に採用される例の有無について検討しよう。

『新歳時記』初版および改訂版には、日本でも比較的耳馴染みのある「温泉」を筆頭に、「春聯」「初筏」「水碓」「春窮」と、朝鮮半島との関係が深い季題が複数収録されている。中でも「水碓」や「春窮」は、『新歳時記』への採用開始時期

こそ「パカチ」とはされるものの、朝鮮半島ならではの季題として『新歳時記』に収録されている点は注目に値する。

さらに、朝鮮半島を想定した季題は、傍題の中にも確認される⁽¹⁶⁾。『新歳時記』の季題「狼」項は、初版と改訂版で例句の順序が入れ替わっている。これは、傍題「ぬくて」の例句よりも、首題の「狼」の例句が先に来たほうが句作者の便宜にかなうであろうという、歳時記編者の配慮ではないかと察せられる。言うのも、解説文にあるように「ぬくて」⁽¹⁷⁾は朝鮮狼を指す。

そこで、「季題の排列は大体東京を中心とし」という歳時記編集上の立場からすると、季題の配列のみならず、例句の配列もまた、首題「狼」の例句を傍題「ぬくて」の例句の前に持つてくるのが適切とされ、改版時に改められたとしても首肯できる。また『新歳時記』が旨とする「作句本位の歳時記」を作るという『新歳時記』の編集方針から考えても、日本の本土に居住する多くの句作者にとっては、「ぬくて」よりも本土に棲息する「狼」の方がより馴染み深く、句作の機会も多いと考えられると推測することができる。さらに「狼」項は、増訂版になると、解説文の一部と、例句一句が削られ、加えて「豺」という字の書体が、太字のゴシック体から通常の太さの字の明朝体に改められる。この「豺」の字体の変化は「豺」が狼の傍題から外されたことを示す。

初版および改訂版『新歳時記』「狼」項中の、「朝鮮狼のことをぬくてといふ」の一文にある「ぬくて」は、太字のゴシック体で記されていること、および例句中で「豺」という字に「ぬくて」のルビが振られていることから、改訂版の段階まで

は「狼」の傍題として認められていたとわかる。朝日辞典を参照すると、朝鮮語で狼を指す語は「늑대」であるので、「ぬくて」は狼を指す朝鮮語「늑대」の音を、平仮名で表記したものと考えられる。このように、朝鮮半島を想定した季題の、虚子編『新歳時記』への採用は、首題のレベルでも傍題のレベルでも確認できるのである。

このように考えてくると、「パカチ」は主に朝鮮半島を舞台に想定して季題として設定され、『新歳時記』に採用された季題であるとしてよいだろう。『新歳時記』の「パカチ」は、今日の朝鮮半島に残る바가지の原料となる果実植物に同一であると考えられる。

ではなぜ、「パカチ」や「オンドル」、「ぬくて」などの朝鮮語が、季題として『新歳時記』初版および改訂版に収録されることになったのであろうか。戦後刊行の増訂版では削られていることから考え、これらの語は、戦前、戦中には季題として必要とされたものの、敗戦後には不必要となった、もしくは削らざるを得なくなった季題であると考えられる。よって、戦前、戦中に、日本の植民地や勢力圏を出自とする言葉を、季題に設定したものと推測される。

これらの例は、朝鮮語、ひいては、外地の言語の、内地への流入の例としても注目されるが、歳時記や高浜虚子の事績という視点から見ると、虚子編『新歳時記』の首題の増補ないし削除の方針と、外地の誕生、拡大、喪失との関係性が、また、傍題、季題解説文、例句にまで及ぶ『新歳時記』の改訂・再改訂の緻密さが浮かび上がってくる。と同時に、虚子の、朝鮮はじ

め大陸や新地への強い関心も見取ることができる。

五 外地を想定した季題の例②―バナナ

続いて季題「バナナ」について考察しよう。「バナナ」は改訂版において「熱帯季題」群の中に組み込まれたことから、管見の範囲でも度々先行研究に取り上げられている。

「熱帯季題」が増訂版において削除された理由については、先行研究によって、太平洋戦争敗北による日本の「版図」縮小に最大の原因があると指摘されている。虚子は「熱帯季題小論補遺」の中で、「熱帯季題」を設ける理由の一つとして、「熱帯」地方の俳人の便宜のためということを挙げており、「熱帯季題」が、主として、拡大した日本の勢力圏を舞台に想定して設定されたことを窺わせる。ところが後に、敗戦に連関し、外地から日本人が引き揚げ、「熱帯季題」を本当に必要とする句作者が殆どいなくなる。先行研究の指摘は、この出来事に「熱帯季題」削除の大きな一因を求めたもので、首肯できる。

しかし、季題「バナナ」の削除については、これを過失と見るべきであろうか。

虚子編『新歳時記』の改版・再改版に際して、しばしば首題以下例句や季題解説文にまで緻密に修正が加えられている点は、先に確認したとおりである。この事実から、内容を精密に点検吟味されているはずの『新歳時記』において、過失による首題削除があったとは考えがたい。

『新歳時記』初版、改訂版の「バナナ」項を見比べると、実は、「バナナ」項自体も、改版の再々項の内容が書き換えられ

ている季節の一つであることに気づく。注目すべきは、まず初版には確認できる、首題下の㊦という記号が、改訂版では消されている点、次に初版の例句前の前書「台湾所見」が改訂版では削られている点の二点である。この二点の異同は、改訂時、「バナナ」が「熱帯季節」群に組み込まれたことに深く関係すると見られる。

まず首題下の㊦という記号は、初版における「バナナ」が夏の間、つまり陽暦五月から七月のうちの、少なくともふた月以上に互る季節であることを示している。これに対し、改訂版における「バナナ」は「熱帯季節」部の所属とされている。したがって、一年中暑い「熱帯」の季節である以上、季節のいわば旬を問題にする㊦という記号は外さざるを得まい。現に、他の「熱帯季節」にも、㊦の記号は一切付されていない。

ついで、前書「台湾所見」の削除についてであるが、「バナナ」が「熱帯季節」である以上、例句も「熱帯」における句として掲載すべきとの判断から、台湾を詠んだ句である事実には目をつぶることにしたものと推測される。

さて、初版からすでに首題とされていた季節で、改版時に「熱帯季節」に組み込まれた季節としては他に二つ、「鳳梨／パイナップル」と「仏桑花」が確認できる。

初版と改訂版の「鳳梨／パイナップル」項を比較するとき、まず注目できるのは「鳳梨」と「パイナップル」の首題交代である。漢字圏外からの外来語であることが明らかで、カタカナ表記の「パイナップル」に首題を変更したことで、季節、すなわちここでは「熱帯」のイメージが想起されやすくなったとい

うことは想像に難くない。また、改訂版の「パイナップル」項の解説文に用いられている「内地」という語は、改訂版の「バナナ」項にも用いられていたが、ここからは改訂版の「パイナップル」「バナナ」が共に、生産地として内地ならざる場所を想定されていることが看取される。さらに「パイナップル」の例句に、「日章旗」と書いて「ひのまる」と読ませる例句を採用している点からも、初版の季節「鳳梨」と、改訂版の「熱帯季節」としての「パイナップル」が、同一の果実植物を指しながら、想定された季節の舞台となる地という点においては、異質の季節であることが窺える。

増訂版における「バナナ」の削除が過失であるならば、「鳳梨／パイナップル」「仏桑花」の削除もそれに準ずると見なければならぬ。しかし、三つの首題を総合して考えるとき、先の「パカチ」や「温突」と同様、これらの季節は、外地を想定した季節として初版に採用され、その後改訂の際「熱帯季節」に組み込まれ、増訂版刊行時には不要、もしくは削らざるをえない季節となったために削除されたという可能性が見えてくるだろう。

このように見てくると、増訂版における「熱帯季節」の削除理由として、先行研究が指摘した、太平洋戦争敗北による日本の「版図」縮小は、一部の「熱帯季節」の『新歳時記』からの削除の理由にとどまらない。「バナナ」の削除についても、他の「熱帯季節」の削除と同様、外地の喪失に起因するものと考えられるのではないか。

明治三十七年から明治四十四年にわたり使用された高等小学

校用国語科国定教科書には、熱帯植物の一例としてバナナと鳳梨が紹介されている。^②これによると、『新歳時記』初版の刊行された昭和九年よりずっと遡つて、台湾は有力なバナナの産地であると認識されていたことが窺える。

またこの資料からは、バナナも鳳梨も共に、植物としてはここでいう「熱帯地方」に存し、「食用果実」としては内地の人々にも認識され、その食卓にも上り得たことが読み取れる。つまり、地に根を下ろす植物の姿でも、果実部分のみという食料品の形でも、植民地や勢力圏まで含めた当時の「日本」には存し得たのである。

しかし、敗戦により、ここに挙がるバナナや鳳梨の産地は、悉く日本の植民地や勢力圏ではなくなった。このことは国内にバナナや鳳梨が根を下ろすことは殆どなくなったことを意味する。またこれらの島々が諸外国の統治下に入ったからには、当然、昭和二十六年当時、これら果実の国内流通量が敗戦前に比べ大きく減少したことは想像に難くない。

したがって、敗戦により、日本国内においては、地に根を張る植物の姿のバナナや鳳梨も、果実のみの食料品の姿のそれらも、ともにあまり見られなくなつてしまつた、あるいは国内にあるべき物でなくなつてしまつたものと考えられる。

このように考えてくると、「椰子」や「護謨樹」などの「熱帯季節」が虚子編『新歳時記』再改版の際に削除されたのと同じに、「バナナ」や「鳳梨」を扱うことができるだろう。「バナナ」や「鳳梨」が『新歳時記』増訂版に無い大きな理由は、やはり、敗戦による日本の外地の喪失により、『新歳時記』編者

が、意図的に削除したためではなからうか。

六 結びにかえて

以上、「バカチ」と「バナナ」を例に虚子編『新歳時記』三版種の異同について考えてきたが、『新歳時記』再改訂の有力な一因として、やはり敗戦を考えざるを得まい。

『新歳時記』にはこの他にも、満州を舞台として想定した「蠶」、中国を想定した「爆竹」「寒食」「苦力来る」、極地を想定した「馴鹿」「北極光」といった首題、また「入営」「徴兵検査」「大演習」「除隊」といった軍事関連の題、戦前戦中の農地制度を背景とする「年貢納」といった題が存したが、これらは悉く再改訂の際に削除されている。また、祝日の季節については、「天長節」「明治節」「紀元節」が再改訂の際に削除されたが、代わつて「天皇誕生の日」「文化の日」が新たに増訂版に組み込まれている。これは、先の三つの祝日が戦後一旦廃されたものの、うち「天長節」と「明治節」が昭和二十六年の『新歳時記』再改訂までに名前を変えて「復活」したという事実と無関係であるまい。

このように、少なくとも、敗戦後の外地喪失、軍の解体、祝日の変更、農地制度の変更などと時期をほぼ同じくして、多くの季節が『新歳時記』から姿を消したり、一部は新たに登場したりしていることは、表1、2から明らかである。

ここで、初版から改訂版への改訂時に、「熱帯季節」を中心とする首題が増補された点に改めて目を向けて総括すると、虚子編『新歳時記』の太平洋戦争前の改訂は、外地の拡大や外地

への日本人の入植が進むという時勢を背景に、首題の数を増大させる形で行われ、敗戦後の『新歳時記』再改訂は、太平洋戦争敗戦に伴う日本の外地喪失や種々の政策の変更という時勢の変化を背景に、首題の数を減少させる形で行われたと言えよう。虚子編『新歳時記』はこのように、実作者たちを取り巻く情勢の変化に対応して、その内容を二度にわたり変えてきたという面を持っており、それが改訂および再改訂時に発生した異同に表出しているのである。

今後より詳細に調査していく必要があるが、今回の調査で大きな見通しを立てることができたのではないかと思う。

今後の課題として、表2のa型やe型、「人日」という首題の増訂版における登場など、大きな異同の流れでは説明し得ない首題についての調査や、首題よりも細かいレベルでの異同の調査を行うことにより虚子編『新歳時記』の各版種間の比較を、今後一層綿密に行い、論を深めていきたい。また、これを始めとして、虚子のロングセラー『新歳時記』を多角的な視点から追究していきたいと考えている。(終)

七 注

(1) 虚子が直接編集作業に携わった歳時記、季寄せで、『新歳時記』に先行するものとしては、明治の新題を取り入れたつもも、全体としては精選した季題のみを列挙し、例句は載せない『袖珍俳句季寄せ』(虚子編、一九〇三年二月、俳書堂)、同様に季題の精選を図った『写生を目的とする季寄せ』(ホトトギス発行所編輯部編、ホトトギス、大正八年一月号付録)、網羅的に季題や例句を収集、掲載した、百科事典のような性質も持つ『俳諧歳時記』冬之部(虚子編、昭和

八年十月、改造社)、および春之部(虚子編、昭和八年十一月、改造社)が挙げられる。これらの歳時記、季寄せとの比較等については、別稿を期したい。

(2) 虚子編『新歳時記』についての先行研究の主なものとしては、井出原太郎(引用①)や本井英(引用②③)、三村昌義(後掲、注(3))によるものが挙げられる。このうち、『新歳時記』の改版に関する内容のものを、左に三つ引用する。

引用① 井出原太郎による『新歳時記』の先行研究

印度洋を往復して、熱帯季題に関心を寄せ、これを『新歳時記』に組み入れたことがある。赤道、南十字星、月下美人などというのもあった。結局、また切り棄てたが。(井出原太郎「虚子編『新歳時記』より『新歳時記』(清崎敏郎・川崎展宏編『虚子物語』(有斐閣ブックス) 昭和五十四年、有斐閣)

引用② 本井英による『新歳時記』先行研究その一

熱帯季題(ねったいきだい)

高浜虚子が提唱した一群の季題(季語)。虚子は一九三六(昭和11)年、渡欧の旅に発ったが、その途次シンガポールを訪れ、親しく熱帯の氣候・風物に触れて、一群の言葉を熱帯における季題とすることを提唱した。虚子自身もその後、コロンボで(古倫母に黄金色なる鶯が居た)と詠じた。その後、四〇年改訂の『新歳時記』夏の部に合計三五の熱帯季題を掲載、その内容は「熱帯」「赤道」等の地名。「スコール」「貿易風」のような氣象。「象」「水牛」といった動物。「パイナップル」「椰子」の如き植物であった。これら熱帯の風物をすべて夏の季題とするということは、あくまでも季節感の中心を日本のそれに置くというもので、世界各地それぞれの季節感を俳句に持ち込むことによる混乱を避けるという方針であった。なお太平洋戦争後日本の版図が狭まったのに連関して、五一年の『新歳時記』以降熱帯季題は削除された。「本井・英」(稲畑汀子・大岡信・鷹羽狩行監修、山下一海・今井千鶴子・宇多喜代子ほか編『現代俳句大事典』二〇〇五年、三省堂)

引用③ 本井英による『新歳時記』先行研究その一

太平洋戦争での敗北は日本の版図を一気に縮める。つまり熱帯で俳句を作る日本人などいなくなるわけだ(このことは逆に戦前の「熱帯季節」なるものがどの辺のニーズに応えたものであったかを物語る)。そこで虚子は昭和二十六年の歳時記改訂で、これら三十五項目を削除する。「バナナ」は可哀そうに、もともと初版からあったのに、ついうっかりこの時に消されてしまった。

(本井英「虚子「渡仏日記」紀行」平成十二年、角川書店)

(3) 本稿では季節のうち、特に歳時記の各季節項目の先頭にある題名、傍題に対し首題と呼ぶ。首題という語のこのような使い方は、三村昌義「虚子編『新歳時記』についての一考察」(神戸親和女子大学親和国文)第四十一号、二〇〇六年十二月)にて、「虚子編『新歳時記』の項目として立っている季節(首題)」とされていることに就いたものである。したがって、本稿における季節とは、傍題と、首題との総称であるとする。

(4) 調査の底本として、以下の三本を用いた。

初版：高浜虚子編『新歳時記』昭和九年十一月初版、昭和十四年三月四二版、三省堂

改訂版：高浜虚子編『改訂 新歳時記』昭和九年十一月初版・昭和十九年七月改訂三十二版、三省堂

増訂版：高浜虚子編『新歳時記 増訂版』一九三四年(昭和九年)十一月初版・一九四〇年(昭和十五年)四月改訂版・一九五一年(昭和二十六年)十月増訂初版・二〇〇二年(平成十四年)十一月増訂六九刷、三省堂

(5) 井出原太郎「虚子編『新歳時記』より」『新歳時記』(清崎敏郎・川崎展宏編『虚子物語』(有斐閣ブックス) 昭和五十四年、有斐閣)

(6) 虚子編『新歳時記』改訂版(昭和十五年四月、三省堂)に、「訂正すべき二二三の季節、並に熱帯の気候・動植物・人事等のうちで已に夏期に属するものとして諷詠し来つたものを増補し、例句も千余句は殖やしたことになる、それは主にホトトギス雑詠選集春の部に採録した句である。」とある。さらに、「新歳時記」増訂版(昭和二十

六年十月、三省堂)に、「季節其他に訂正すべきところがあらば訂正し度いとの話があつたので多少訂正した。曩きに加へた熱帯季節の類は省いた。又例句にホトトギス雑詠選集夏の部以下を(春の部も多少)加へた。」とある。

(7) 「熱帯季節」の定義は前掲、注(2) 引用②参照

(8) 前掲、注(2)に挙げたものの他に、深見けん二、高田風人らによる「五百五十句」研究(1) - (16)「花鳥諷詠」(伝統俳句協会機関紙)平成元年十二月-平成三年三月)がある。

(9) 論文末尾添付の表1参照

(10) 論文末尾添付の表2参照

(11) b型の季節のうち、内地の季節(軍事関係の「八宮」「徴兵検査」「大演習」「除隊」、曆に関係しb型の季節「天皇誕生の日」「文化の日」の出現とも関わる「紀元節」「天皇節」「明治節」、および「農地改革」)についての詳細な調査は、別稿を期すが、これら季節の消失や出現の背景は本論の結論と無関係ではないと考える。

(12) 大岡信ほか編『大歳時記』第二巻(全四冊)(一九八九年、集英社)、および、水原秋桜子・加藤楸邨ほか監修「カラー図説日本大歳時記 座右版」(昭和五十八年、講談社)

(13) 虚子編『新歳時記』初版、昭和九年十一月、三省堂

(14) 朝日辞典を紐解くと、bガジ項には次のようにある。小学館/韓国・金星出版社共同編集『朝鮮語辞典』(一九九三年、小学館)には「図一 パガジ、ひささ。▼叫 (ふくべ)を二つに割り中身をえぐって乾燥させ容器として用いる。プラスチックで形どつたものもある。」。大阪外国語大学朝鮮語研究室編(主幹塚本勲、北嶋静江)『朝鮮語大辞典』上巻(一九八六年、角川書店)には、「バガチ (叫) (ふくべ)を真二つに割り中身をくり抜いて干して作った容器) バガチ、バガチの器(ユン) (中略) ①*バガチは朝鮮民族の生活と密接なかわりがある。普通、「ふくべ」で作つたらしいもので、米をといだり、水を汲んだり日常広く用いる。「ひょうたん」で作つたものは丑子叫という。最近はプラスチック製のものが多く、それもバガチというが、丑 (Dow. ボール) ということもある。」。また、

朝鮮辞典の場合も、ハカチを翻訳引用すると次のようである。民衆書林編集局編「エッセンス国語辞典〔特装版〕」(一九七四年初版、二〇〇一年第五版、民衆書林)には「**罎**」水を汲んだり物を入れる器」、李熙昇編「ハングル大辞典 THE NEW KOREAN DICTIONARY」(一九八三年、民衆書林発行、三修社発売)には「名水を汲んだり物を入れる器。ふくべを二つに割り、種などをえぐり出して茹でて干したものと、木をえぐって作ったもの、またはプラスチックで作ったものがある。瓢壺」。

- (15) 「ホトトギス」第四十三巻第一号(五百十八号・昭和十四年十月)「各地座談会」中「京城」部の中に、「バカチ」について左の記事が見られる。

迦南。そんなら話をかへて、独特の植物のバカチはどうです。

自注。バカチといふのは、元来朝鮮語ではあの実の殻を水汲やなんかに使ふ器にしたのを云つて、植物の時の名はバカチとは言はぬ。ペクとか何とか言ふんだ相だ。通訳に聞いたんだが。

蘭の秋。併し我々俳人仲間では今日バカチと云へば植物も云ふし、器になつたものも云ふやうだね。花が咲けば花バカチ。青い実のを青バカチ。屋根になつて居るのを屋根バカチ。

- (16) 小学館「日本国語大辞典」第二版第十一巻のへちま項に、「①ウリ科のつる性一年草。(中略)②へちまの実を乾燥させた繊維でつくつた垢すり。へちまの皮」とある。

- (17) 虚子編「新歳時記」初版(昭和九年十一月、三省堂)、および改訂版(昭和十五年四月、三省堂)における「温突」「春聯」「初筏」「罎」「水碓」「春窮」の各季題項を左に引用する。

初版「新歳時記」「温突」項

※改訂版「温突」項と若干の異同有

温突**罎**朝鮮や満州の家屋には床下に煙道を設けてあり、冬季此に火煙を通して家屋全体を暖める。此の装置を温突といふのである。

(以下略)

初版「新歳時記」「春聯」項

春聯 支那や朝鮮では、旧正月を祝ふために門の両側や入口の扉などに、赤い紙に目出度い文句を書いて貼る。(以下略)

※改訂版「春聯」項も左と同文

初版「新歳時記」「初筏」項

初筏 鮮満地方殊に鴨緑江や松花江沿岸等では、上流の森林を晩夏から初冬にかけて大仕掛に伐採する。(以下略)

初版「新歳時記」「罎」項※改訂版の「罎」項も左と同文

罎**罎**さそりともいひ朝鮮・台湾・満州・支那等に棲む。(以下略)

改訂版「新歳時記」「水碓」項

水碓**罎**朝鮮では春になると野に出て水辺で洗濯をし碓をうつといふことだ。秋の碓と区別した方がよい。

江かれて海のごとしや水碓 蘭の秋
鮮人になりきつて住み水碓 石汀

改訂版「新歳時記」「春窮」項

春窮**罎**四月から五月にかけて、麦の取入前、食物の不足を来す時のことで、朝鮮ではさういふことがある。

(18) 筑紫警井「歳時記の百年 第八回 虚子編「新歳時記」(「俳壇」十七巻九号、二〇〇〇年八月)

(19) 虚子編「新歳時記」初版(昭和九年十一月、三省堂)、改訂版(昭和十五年四月、三省堂)、増訂版(昭和二十六年十月、三省堂)における「狼」項はそれぞれ左に引用するとおりである。

初版「新歳時記」「狼」項

狼**罎**狼は深山に棲息してゐるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求め。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつく。火を恐れるから、山野を行く時は火繩を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は真の狼ではなく、豺、と称せられる小形のものである。

朝鮮狼のことをぬくていふ。

警察に吊されてある豺かな 友萍
狼やそろへ立てたる馬の耳 素心

改訂版 虚子編「新歳時記」「狼」項

狼 狼は深山に棲息してあるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求め。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつ。火を恐れるから、山野を行く時は火縄を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は眞の狼ではなく、豺と称せられる小形のものである。朝鮮狼のことをぬくてといふ。

狼やそろへ立てたる馬の耳

警察に吊されてある豺かな

増訂版 虚子編「新歳時記」「狼」項

狼 狼は深山に棲息してあるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求め。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつ。火を恐れるから、山野を行く時は火縄を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は眞の狼ではなく、豺と称せられる小形のものである。狼やそろへ立てたる馬の耳

素心

友萍

(20) 虚子編「新歳時記」初版(昭和九年十一月、三省堂)序

(21) 前掲、注(20) 参照

(22) 小学館/韓国・金星出版社共同編集「朝鮮語辞典」(一九九三年、小学館)の「[ㄱ]」項に、「[ㄱ] (動) チョウセンオオカミ(朝鮮狼)、ヌクテ。」とある。

(23) 前掲、注(18) 参照

(24) 前掲、注(3) および注(8) 参照

(25) 前掲、注(3) 引用②および③参照。引用中の語「版図」は、當時の俳人たちの認識に基づき、内地と外地(植民地および勢力圏)の総称として用いられているものと解した。

(26) 初出は昭和十一年九月「ホトトギス」、引用は高浜虚子著、高浜年尾・福田清人ほか編「定本 高濱虚子全集 第十一巻 俳論・俳話集」昭和四十九年、毎日新聞社

(27) 虚子編「新歳時記」初版(昭和九年十一月、三省堂) および(改訂版昭和十五年四月、三省堂)の「バナナ」項を左に引用する。

初版「新歳時記」「バナナ」項

バナナ バナナ即ち甘蔗は、生る所は多く常夏の国である。滋養にもなるし、夏季の生食は広く好まれる。腐敗も早いせいか、夜の街頭で、夜涼の人々に向つて特異な投売りが展開されたりもする。丈余の茎頭に、大長葉の間から累々として垂れ下がった群果は蓋し見事なものである。

台湾所見

舷梯を追い戻されぬバナナ売

バナナ買ふ程の馬來語覚えけり

改訂版「新歳時記」「バナナ」項

バナナ バナナ即ち甘蔗は、産地は多く常夏の国である。丈余の茎頭に、大長葉の間から累々として垂れ下がった群果は蓋し見事なものである。内地にも大量に輸入され、滋養にもなるし、夏多く食べられる。各に遠き故郷やバナナむく

舷梯を追い戻されぬバナナ売

バナナ買ふ程の馬來語覚えけり

川を見るバナナの皮は手より落ち

虚子

(28) について、虚子編「新歳時記」凡例に、左のようにある。

二、題下にの記号に挿入したものは其月に限らず、同季の三月に互るものといふことを指示したのである。又三月には互らず、二月位に互るものをも其中に籠めた。要するに此題は其月に限つたものでないといふことを明らかにしたのである。又、花や実等の中には此他にも事実上は二月以上に互るものがあるであらう。「新歳時記」初版、昭和九年十一月、三省堂

(29) 虚子編「新歳時記」改訂版に収録された「熱帯季題」は左の三五項である。改訂版の底本においては、このうちのいずれの季題項にも見られなかった。「熱帯」、「赤道」、「馬來正月」、「朝陰」、「木陰」、「オアシス」、「貿易風」、「スコール」、「赤道祭」、「嫁選」、「象」、「水牛」、「鱷」、「極楽鳥」、「熱帯魚」、「火焰樹」、「無憂樹」、「鳳凰樹」、「宝冠木」、「仏桑花」、「ドリアン」、「マンゴスチン」、

「マンゴー」、「パパヤ」、「龍眼」、「バナナ」、「パイナップル」、「椰子」、「檳榔樹」、「護謨樹」、「榕樹」、「クロトン」、「月下美人」、「ブーゲンベリア」

(30) 虚子編『新歳時記』初版(昭和九年十一月、三省堂)および(昭和改訂版十五年四月、三省堂)の「鳳梨／パイナップル」項を左に引用する。

初版『新歳時記』「鳳梨」項

鳳梨 鳳梨即ちパイナップルは夏淡紫色の花を咲かせるが、もとく熱帯産である。果は松毬に似て五・六寸位、赤黄色をして頭に葉を生やしてゐる。生食もされるが、一般には缶詰の方が親しまれる。

改訂版『新歳時記』「パイナップル」項

パイナップル パイナップル即ち鳳梨で、松毬に似た五・六寸くらゐの大きな実である。赤黄色をして頭に葉を生やしてゐる。内地では、生食もされるが、主に缶詰の方が親しまれる。

ウチ日章旗や鳳梨熟す小学校

扶桑花の長き垣あり異人墓地

(31) 前掲、注(27) 参照

梧桐

(32) 高等小学校用国語科国定教科書『高等小学読本』(明治三十七年—明治四十四年使用)巻六、第十一課「熱帯植物」より該当箇所を左に引用する。

『高等小学読本』における「バナナと鳳梨

熱帯地方ニハ、ソノ他ノ有用植物、ハナハダ多シ。サトウキビ、ゴムノ木、コーヒーノ木、藍ナド、ソノ主ナルモノナリ。(中略)

マタ、食用果実ヲ生ズル植物、ハナハダ多シ。バナ、アナナスナド、ソノ主ナルモノナリ。バナ、ハ芭蕉ノ類ニシテ、広ク、熱帯地方ニ培養セラレ、ワガ琉球、台湾、小笠原島ニモ、多ク産ス。アマタノ変種アレドモ、葉ト茎トハ芭蕉ニ似テ、ハナハダ大キク、果実ハ胡瓜ニ似テ、刺ナク、カツ、厚キ皮アリ。果肉ハ澱粉多クシテ、味ヨロシ。

アナ、スハ、茎、ハナハダ短ク、葉長大ニシテ、一所ヨリ群リ

出テ、中ニハ、刺アルモノアリ。果実ハ、松ノ実ニ似テ大キク、赤色ヲオビ、上部ニ、葉群アリ。果肉ハ、味、ハナハダ甘クシテ、香気強シ。

付記 本稿は、第四〇七回国文学研究会(二〇〇八年七月五日、慶應義塾大学)における口頭発表に基づく。席上貴重なご教示を賜った先生方に心より御礼申し上げます。

なお、本稿脱稿後、筑紫磐井「虚子の季題論と季題」(国文学 解釈と鑑賞 第七十四卷十一号、平成二十一年十一月)が発表された。併せて参照いただきたい。

注9-表1:『新歳時記』三版種間の首題異同一覧表

一月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
		人日
	入営	
蕪玉(餅花の項中)	蕪玉(餅花の項中)	
入営		
	馴鹿	
	北極光	

二月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
旧正月	睦月	睦月
睦月	旧正月	旧正月
春聯	春聯	
	爆竹	
紀元節	紀元節	

三月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
初夜	初夜	
	水占	

四月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
苦力来る	苦力来る	
寒食	寒食	
糺	糺	
天長節	天長節	天皇誕生の日
鴨川踊		
	春窮	

五月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
	鴨川踊	鴨川踊
徴兵検査	徴兵検査	
輪廻		
	四迷忌	
夏實(安長の項中)		

六月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
夏の朝		
	輪廻	輪廻
蛸	蛸	

七月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
	撒水車	撒水車
立版引(是し巻の項中)	立版引(是し巻の項中)	
バナナ		
鳳梨		
	永餅	永餅
	西日	西日
	ボート	ボート
	ヨット	ヨット
仏桑花		
	無帯	
	赤道	
	馬来正月	
	朝陰	
	木燄	
	オアシス	
	貿易風	
	スクール	
	赤道祭	
	稼道	
	象	
	水牛	
	鰐	
	鱈	
	梅染鳥	
	無帯魚	
	火焰樹	
	無臺華	
	風隔樹	
	宝冠木	
	仏桑花	
	ドリアン	
	マンゴスチン	
	マンゴー	
	パパイ	
	竜眼	
	バナナ	
	パイナップル	
	椰子	
	檳榔樹	
	護謨樹	
	榕樹	
	クロトン	
	月下美人	
	ブーゲンベリア	

八月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
異同みられず		

九月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
バカチ	バカチ	

十月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
椰子	通草	通草
通草	椰子	椰子
明治節	明治節	

十一月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
		文化の日
大演習	大演習	
除隊	除隊	

十二月		
初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
温突	温突	
年貢納	年貢納	

注10—表2：三版種間で異同の見られた首題の、出現パターンによる分類

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
a型	○	○	○
旧正月	○	○※1	○※1
睦月	○	○※1	○※1
鴨川餅	○	○※3	○※3
輪餅	○	○※3	○※3
餅子	○	○※1	○※1
通草	○	○※1	○※1

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
b型	○	○	×
人嘗	○	○※3	×
餅玉(餅花の項中)	○※2	○※2	×
春勝	○	○	×
紀元節	○	○	×
初伐	○	○	×
苦力来る	○	○	×
寒食	○	○	×
糰	○	○	×
大長節	○	○	×
徴兵検査	○	○	×
鯛	○	○	×
立版古(起し絵の項中)	○※2	○※2	×
バナナ	○	○※3	×
鳳梨	○	○※3	×
仏桑花	○	○※3	×
バカチ	○	○	×
明治節	○	○	×
大演習	○	○	×
除隊	○	○	×
温突	○	○	×
年貢納	○	○	×

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
c型	○	×	×
夏の朝	○	×※5	×

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
d型	○	×	○
該当なし			

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
e型	×	○	○
蹴水車	×	○	○
米餅	×	○	○
西日	×	○	○
ボート	×	○	○
ヨット	×	○	○

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
f型	×	○	×
駒鹿	×	○	×
北極光	×	○	×
爆竹	×	○	×
水碓	×	○	×
春餅	×	○	×
四迷忌	×	○	×
熟帯	×	○	×
赤道	×	○	×
馬来正月	×	○	×
朝陰	×	○	×
木蔭	×	○	×
オアシス	×	○	×
賀初風	×	○	×
スクール	×	○※4	×
赤道祭	×	○	×
榴蓮	×	○	×
像	×	○	×
水牛	×	○	×
麩	×	○	×
鱈	×	○	×
梅染鳥	×	○	×
無著魚	×	○	×
火焰樹	×	○	×
無憂華	×	○	×
鳳凰樹	×	○	×
宝冠木	×	○	×
ドリアン	×	○	×
マンゴスチン	×	○	×
マンゴー	×	○	×
パパヤ	×	○	×
竜眼	×	○	×
椰子	×	○	×
檳榔樹	×	○	×
護謨樹	×	○	×
榕樹	×	○	×
クロトン	×	○	×
月下美人	×	○	×
ブーゲンベリア	×	○	×

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
g型	×	×	○
人日	×	×	○
天皇誕生の日	×	×	○
文化の日	×	×	○

型名	初版新歳時記	改訂版新歳時記	増訂版新歳時記
h型	×	×	×
該当なし			

- 注I：※1は版によって首題配列が前後逆転していることを示す。
 注II：※2は初版、改訂版では目次のみ(半)首題扱い、事実上は傍題扱いであったが、再改訂の際目次上から消え、名実ともに傍題になった季節を示す。
 注III：※3は改訂時に首題排列が二つ以上の首題を飛び越えて移動、変更しているものを示す。
 注IV：※4は改訂時に傍題から首題へと扱いが変わったことを示す。
 注V：※5は改訂時に首題から傍題へと扱いが変わったことを示す。
 注VI：h型は今後、『新歳時記』とそれ以外の歳時記、季寄せとを比較する上で必要になるので、あえて設けた。